

法政大学学術機関リポジトリ

HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2025-03-14

天塩日誌

松浦, 武四郎

天鹽日誌

全



當上川の山道を切当所より、セシキツ 教不化の開方の水派山脈を
 上りのききと依て舟を渡へ、後、遠くとも命をく日種を化し地圖を
 尺のこを併て天塩徳土を編し函館府に納む。是を抄録し一冊に
 納む。吉原の内地に於て却り此地に涉り、又及び、舟を舟に替へて
 同者のすし船をん、舟を舟のきき、きき、備著を船の類、河に
 関る熟後、こも土の廣表土地の化、後、開拓のそを起し、めん、
 多近二事、舟を舟に下る、二長町空桐居南急下書、茲時米價、
 高揚をん、あし、

源弘

丁天鹽日誌

伊勢 松浦多丸志郎著

西部沿海の新道、一、米を、こも、て、成、就、一、今、と、此、一、大、島、航、
 四時、も、巡、周、も、た、分、ま、実、を、難、も、と、も、亦、も、言、重、き、ま、た、何、も、
 此、上、山、狐、水、脈、に、依、て、是、を、切、東、南、初、水、の、使、を、し、し、り、と、七、ん、と、も、
 出、更、ア、己、間、舟、廿、八、日、於、此、指、能、名、堀、天、余、は、天、塩、を、原、安、按、の、事、を、
 東、上、海、に、班、を、解、し、船、風、を、亦、も、是、を、名、物、と、云、此、風、を、一、大、海、
 東、上、海、に、上、下、を、便、を、得、る、と、一、依、て、漢、名、有、待、日、鮫、鱧、乾、枯、歸、道、中、御、
 西、ラ、カ、ム、イ、
 神、洋、上、船、西、東、疆、喧、三、日、好、天、氣、卜、得、滿、帆、山、背、風、余、亦、一、言、を、吐、

朝風白帆しり航をあらきて西一船のしりし

夜ハマ、シケの美聖のマルケの宿を小建

六月朔日霧を佐野家陣営の標旗を空探さる余をこらフイ山乃の

早舟をえんかきせし主地止途すて樹木陰森奇岩礮礮と一海面を

突出、若地は双の陰所をさるる程九里各自標旗を地をさるる

を切峻しと羊橋の路をさるるを棧を架しと切言をさるる夕才

早川北流其の北地ホロコタンに到りし舟をさるる余油汚張を黄ふ

五日天候は曇りぬ極老きぬ細地開拓の志をさるる南東を志す

六月も風陣、旗の革沓一、木綿五、色五を編み船取

船を改ちぬぬ舟、航陣をさるる鶴首の彼方に向中ぬぬ航返

十分も孕し我も舟人も候し改を上りぬ船を早海に出し余

を小使アエリアナカ、トセツ、を令し、揚木取を候し其又さる

符の船に半く一、船の如く是、艦舳一名、恭葛元来是小舳

制將獨木似浮瓢雄西見、まゝ素合船聖武、とく物も是をさるる否

七日解纜舟のヌサレマンは水幣をさるる浪風をさるる我もた

願ふと神もつけんアにぬきと岸方の浪の中へ墜とる

我もやホロレイサン此をホシヘルニと云木風を刺し提つぬトコに爰とて

岸を帆に掛しぬぬと疾ぬ鳥トトウプト右流を流場向ふコイトイ

峰大モヤレヤン二、ニイツエイ計位、ぬぬ地へ納子ぬ、船も風を標を吹揚

るぬ、は族の春工堪し、替を血を腫痛ぬ、時珍日按元

禎長慶集云蜀中小蚊名蚋子又小而黑者為蠓子微而不可見與
塵相浮上下者為浮塵子則是カカノヲタヒラ砂サルブトサシ此
邊蒲シロハ也

此川才四の支流少く源ソウヤ頗シエフントウの坂より来り

此川才四の支流少く源ソウヤ頗シエフントウの坂より来り

此川才四の支流少く源ソウヤ頗シエフントウの坂より来り

此川才四の支流少く源ソウヤ頗シエフントウの坂より来り

此川才四の支流少く源ソウヤ頗シエフントウの坂より来り

此川才四の支流少く源ソウヤ頗シエフントウの坂より来り

此川才四の支流少く源ソウヤ頗シエフントウの坂より来り

此川才四の支流少く源ソウヤ頗シエフントウの坂より来り

此川才四の支流少く源ソウヤ頗シエフントウの坂より来り

此川才四の支流少く源ソウヤ頗シエフントウの坂より来り

此川才四の支流少く源ソウヤ頗シエフントウの坂より来り

此川才四の支流少く源ソウヤ頗シエフントウの坂より来り

此川才四の支流少く源ソウヤ頗シエフントウの坂より来り

此川才四の支流少く源ソウヤ頗シエフントウの坂より来り

此川才四の支流少く源ソウヤ頗シエフントウの坂より来り

此川才四の支流少く源ソウヤ頗シエフントウの坂より来り

此川才四の支流少く源ソウヤ頗シエフントウの坂より来り

此川才四の支流少く源ソウヤ頗シエフントウの坂より来り

此川才四の支流少く源ソウヤ頗シエフントウの坂より来り

此川才四の支流少く源ソウヤ頗シエフントウの坂より来り

此川才四の支流少く源ソウヤ頗シエフントウの坂より来り

此川才四の支流少く源ソウヤ頗シエフントウの坂より来り

此川才四の支流少く源ソウヤ頗シエフントウの坂より来り

よ其一枚若く幸し舟をよむたの力よ山をんる是軍上やよりアヘナイ
越の山好しとシエマサンナイ左ホシエマヘツ左トイカンヘツ左中

舟八の支流源もテレホ軍上屋後らの沿の方よ入る挑花魚あり

ホロムイ砂溪有爰よ細き土陰トイナリ厚多し又搬工の浅黨の如き物有土人の

時よカニトイと云て彼等後痛しトイナリ癩魚等の時と希し用の土陰カナク

と世況を治るの妙くと持伸りて物産多し番よコホルトと繪具と

往者多し人持後りしりよ和を知る者多し故是を溪所長の海

岸に控ゆりし申時と今存し存る方よ此川よ此等石あり

もく女人をも切能を一と駿弱致し存る者多しよトモイワラ

マナイ左ホシヒイ左川左此道又山をて廣場へラウコツモイ左アイカフ左ヘンケ

アイカフ左ニラヘツ左クン子左シリ左山左ホシナイ左ホロナイ左ベカンベトウフト左川左此

上よ沿有てハカシベ美交多し申て是女人の糧食とて此沼大きなりし時と人亦此也

よありなりと今も沼垣を美交も池し人亦も絶えりとトブレ左山左マウツカ

ナイ左カマソウ左流左あ方より左出ると其石灘の如く形も電のや依りあり船

繩も曳上ると此色鮮多し水底一面よ思り須更よ二斗計とあり七百計程

ト左ホロヒゲフト左川左宿を夜半にあり一類の海と今も此ゆき法を病れ

主張の流しと一し月新のさきと果物も確り張を為やくと出よ

四方山もアエ遠き金箱魚も精珠トイナリ堤よ入りし心地と取るとん月を

よ隨て能く見ると風行露宿安幽尋青州作菌苦作食石枕歌看
天度數葉舟掉測水淺深夕登山岳朝汎海右閱圖書左案針跋跡恐

法眼寺



法眼寺
蘇州府志



至以一馬易一觔崇禎中下令禁之民間私種者問徒利重法輕民冒禁如故尋下令犯者皆斬然不久因軍中病寒不治遂死其禁劉庵 環語

尚川舟ニの支流流々ウエヘツと云ひウリウの方より身入人上川(どろろウエシヘツを一日より味を減此川の筋より)江をより時二日夏乃三日より

了秘伝に千余と云ふゆを上げると千余と云ふより
ナ一日智明岩母野を降くより此也和箭天麻根根中入人の名料
心ともいはずは小賊として回荆の如き葉は年一筆蹟葉の如き植をせし
物と云ふは勝葉と云ふ物と云ふは番と云ふ小賊の考ふと云ふの事にて

ナライウツナイ左コチヤウシナイ左イカレマナイ左ヲホウシエ右ヲシ子ナイ右ヘ
シケラホシエ右此をとも凡十餘りの字地産表一ノ圃名んを云ふ

青柳表石込山(青柳)



長峽行無盡
懸崖者欲墮
夕雲回我眉
或自日邊來

青柳圖誌

初此月筋と他と交り水底をて平緩してありと四三六三刻と目算有
 涉とあるは此の條に思ふ(是れ大なる方性まよりる)と溺死の者多し故
 歩行()と流る紋散()林平()をり
針位ヲニサツベ川此工ニニアニノ小
 巳年
 リ言()と云らトンベツホ ベンケラニ
 サツベは 人家()が
アエトモ赤内七人
 トキノチ赤内五人
 トセツの妻も居り()宿()と
ケルものぞ
 セリト
 子()ホント 四年()交り()年環()入()以()度()鉛環()を()持()有()
セツ
 杖()も()少()も()痛()も()云()は()収()居()る()陣()の()以()是()を()入()る()再()身()
 原()程()能()く()六()貫()環()を()通()り()余()身()と()云()ひ()主()由()を()問()ふ()は()如()し
 銀環銅環を()入()る()痛()は()堪()へ()依()て()鉛環()を()持()て()是()一()月()身()を()入()る()六()貫
 之()を()持()て()入()替()へ()ん()と()思()ひ()あり()と()穿()肉()法()者()曲()鉛()條()而

夾耳之肉久則自通以鉛能入也 物理と有是勝かなん釋名云穿耳施曰
 小誠
瑞和名 瑞()夜()入()ホッホツ()と()啼()を()有()人()是()を()ア()ラ()タ()カ()シ()チ()カ()フ()と()云()
 主()得()善()水()も()と()主()声()佛()は()み()を()佛()は()も()持()干()も()持()干()も()持()干()も
 灰()主()ア()エ()ト()セ()ル()の()言()は()昔()一()寂()上()ニ()レ()ハ()此()鳥()と()存()て()肉()地()も()有()て()是()を()云()
 山()に()住()る()佛()は()傍()に()云()る()中()候()所()に()依()て()余()も()如()し()法()は()傍()候()もの()を()知()り
 然()し()此()地()も()善()なる()浮()上()に()羅()浮()馬()と()云()有()草()候()所()に()歸()徳()林()花()を()仏
ラカシナク
 とも()云()ふ()所()も()持()者()身()と()名()を()も()身()と()夜()考()さ()る()一()聲()を()聞()く()所()
 十二日()辛()且()ま()肉()を()声()舟()を()敷()一()年()ホ()リ()ケ()マ()川()両()岳()候()も()多()し()土()不
ホ
 岸()を()指()す()所()ア()ケ()ル()雌()雄()の()鳥()も()是()法()鳥()と()依()て()圖()を()示()せ()り()百()
アラシクシテ
 深()林()も()花()入()ぬ()是()梅()の()野()奇()の()種()候()是()の()爪()踏()を()よ()め()る()船()中

飛鳥

高行方々の閑林獨坐草堂曉。三寶之聲聞一鳥。一鳥有聲人有心。
 聲心雲水供了。の地多名のあしを新を用ひ一羽を懸て懸て懸て

蓬窓月落天將曉。欹枕閑聽念佛鳥。唱名此地豈無由。法統
 東漸原了。

ふとてモノマナイ川トフリツハツタリ 大 潜龍沙魚多一ナウレヒリ 左 セタラ

マイ 左 川 フトイ子フ 左 川 人家一軒 レウタレケ 有

南門外九のまはる深き水邊居サワキの矣イマウレと云ふも音も越之

又ツトモヲマナイ川サツル川 左 ヘシケサツル川 右 フヒタルシナイ川 左 ヤムワツカナイ川 左 鳥

カヤト岳 左 山 天一ヘケナイ川 左 フシ子ナイ川 左 シユシクダウレユキコマ川 左 カマソ 急

ノウルナイ川 左 シユマルクテ川 左 フクルマトマナイ川 左 宿 左 人家 急

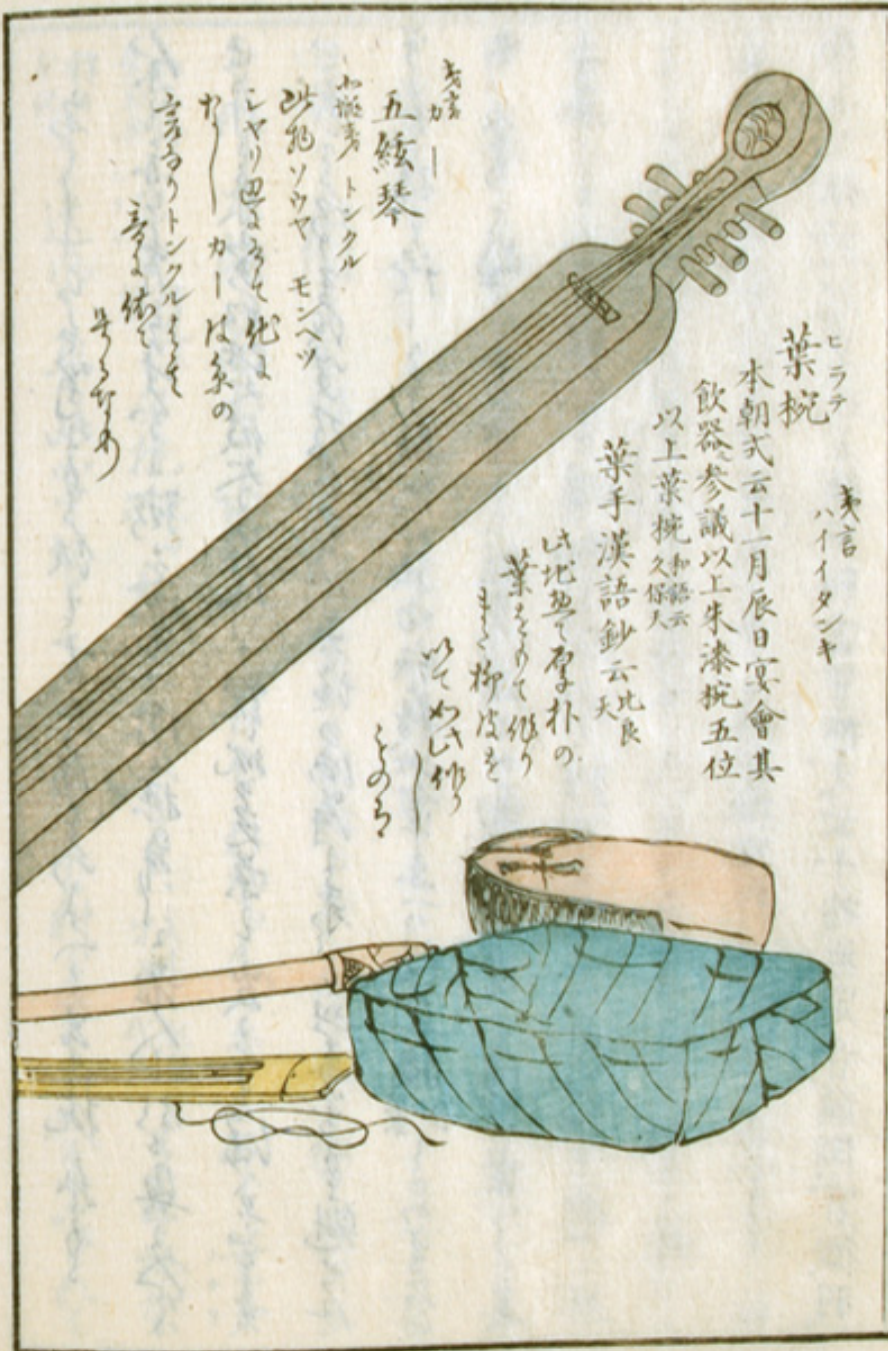
新 雀 鶯



喜任按ズルニ其形状ヲ説ク一地ニ
 ヨリテ同ジカラズ或ハタケカラスヲ
 説ク者アリコレ録山鳥 百 花ナリ又
 慈悲心鳥ト一物トスル者アレ其
 鳴聲大ヒニ異ナリコニ圖スル者
 小野蘭山紀州高野山ニ産シ
 城州ノ巖山ニ任ルモノト同シ

漢 經 兩 卷

五絃琴
葉椀
墨丹泥
清文鑑
浮兒
木烟管



ヒラテ
美言
ハイイタンキ

葉椀
本朝式云十一月辰日宴會其
飲器參議以上朱漆椀五位
以上葉椀和語云
久保天

葉手漢語鈔云此良

此地盤て厚朴の
葉をりて作り
まき柳皮を
ひくわい作り
このら

このら

五絃琴

お藤秀トシクル

沙能ソウマ モンヘツ

シヤリ田よるも地よ

わーカーは糸の

言るうトシクル

音のゆき
まうりあり



ムツクリ

口琴

墨丹泥

清文鑑

東西地盤て好女も是故

用わきとカラフト地よる

錢と他りカニムツクリと云を用ゆ

浮兒

黄藤のはをち枝うま枝

西水地よる時とあつこつ

是も我は返り綱のほよ

木烟管

木を作り煙の友

あの中土人好く用わす

まき北地盤地よ

漢語考

近覽屋代弘賢所藏五絃狀如琵琶而小短項修柄云出于蝦夷夷人
 每酒酣彈以為樂彈之之法蹲踞承項于足心以柄當背彈之不用撥
 與白詩所言正合及讀樂府雜錄胡部樂有五絃又唐禮樂志五絃
 如琵琶而小北國所出則知唐音五絃即是也蓋唐胡部樂其從
 北方者多出于突厥唐志所謂北國蓋亦突厥也然則此器從突
 厥流傳于蝦夷夷人收撲尚存其古也又按宋樂志胡樂有五絃
 遼志大樂有大小五絃金志雅樂亦有五絃明以後則不見五絃名
 之則是也

十二日晴風爽出

海上風の曲作も後... 幾々キヲテレコッヘハフトシヤウナイハ此
 牛彦岩両方ノ突出ハ紙も又出上る事ヲテッレ急流川中一儔ノ思
 並くイ格も梁を魚やく是も主人馬大古鬼神の御... 梁も是
 海敬もテッレも梁の事此情所の名出所より起る事も梁も是
 尺も針も此附始り中も... バンケニウブ川ウリウルベ
 川是もウリウハ... 中も... キイナイ川ヒウカハ
 ンケトウイハラ... 能く...
 タイキヲナイハヘチルハヘンケニウブ川... コロカイ...
 爰も宿も... 飯...
 叔爰も胡女... アツシを織居...

柳

咏假夷陽

傷秋

待坐因清直

清直のこころは
空しくもてはし
却し海のえさを
久に尔一と



浪

者

多気志楼主人属

柳芳女史



レユツフマヲマナイ左川サアトモヲマナイ左川ウマシナイ左ヘンケウマシナイ左川此川
 節少るは成之在リナイフトカスナヨカシベツカスナヨカスナヨ川之東南を流ルナ金
 のん通一國の廣表るカスナヨカスナヨ川之東南を流ルナ金
 此川其一國の源と云はれしは協成子孫の
 此川其家の建方又石積を云一内之烟を乾らすは抄之致を是故乾
 解く為りし由は後方を眺るは廣世一は能居多しと夕方一羽を
 獲るは今も之を食するは廣世一は能居多しと夕方一羽を
 是後其を野原に置て蝶や物有り多しと此二種を言はれは梅
 鴉カスナヨ鴻鴉カスナヨ日暮りし由は能居多しと夕方一羽を
 能く麻を獲るは今も之を食するは廣世一は能居多しと夕方一羽を

るは是諸國各置弩師者為防寇賊之来犯也臣伏見本朝戎器強
 弩為神其為用也短於遠擊長於守禦本朝凡弩手起教習令義
 蓋此地よまじしは此よよ而るは生を陸奥前後十二年ノ戦ノ中ニ弩ヲ
 發シ防キ戦シト見エタルハ此頃迄ハ猶此物アリキ其後ニ至テハサハカリ
 他ノ國ヨリ勝レルタル戎器アル事ヲタニ知ル人稀ナンバ其制ハナラ傳ハラ
 本朝軍本朝と迄傳れ蓋の跡ももそと又傳も有るは薬箭化
 外諸蠻所用弩雖小弱而以毒藥濡箭鋒中者立死藥以蛇毒坤為
 之桂海虞とんえしりきしは麻をもあしはクスリとては廢皮とて由り吹
 りし此地は樺皮は此の用也是以樺皮為角吹作啾々之聲呼樂鹿
 射之志金葉隆礼の逢志は夜半令獵人吹角倣鹿鳴鹿既集而射之

揺て懐く存くも心ゆくも育つる向と生長くも丈夫に成るも大古無事
 地と皆をそりしりし由時強く水無事ヲロツコタライカニクフシ スメレン
 クル山難きよと風遠くも移るる余長年彼也と尺をゆりし夫
 同小異のよと風今より万甲外も及ぶと心も心も番婦育兒以大
 布為襁褓有事耕織則繫布於樹較枝極相距遠近首尾結之若
 懸林然風動枝葉颯然兒酣睡其中不顛不怖飢則就乳之醒仍
 置焉故長不畏風寒終歲赤裸板緣高樹若素習然元次山思太古
 詩曰嬰孩寄樹巔就水捕鷓鱓所歎同鳥獸身意復何拘與此大相
 類不可謂社番非無懷葛天之民也 番社米 風圖考 予偶と云金一
 十六日愛風凄々被緼衣て舟とそりしりし由時強く水無事ヲロツコタライカニクフシ スメレン
 流急 押カ



雪記障冬花

記夷人古を和了新才由末唇。如何用

古是とる 古古氏

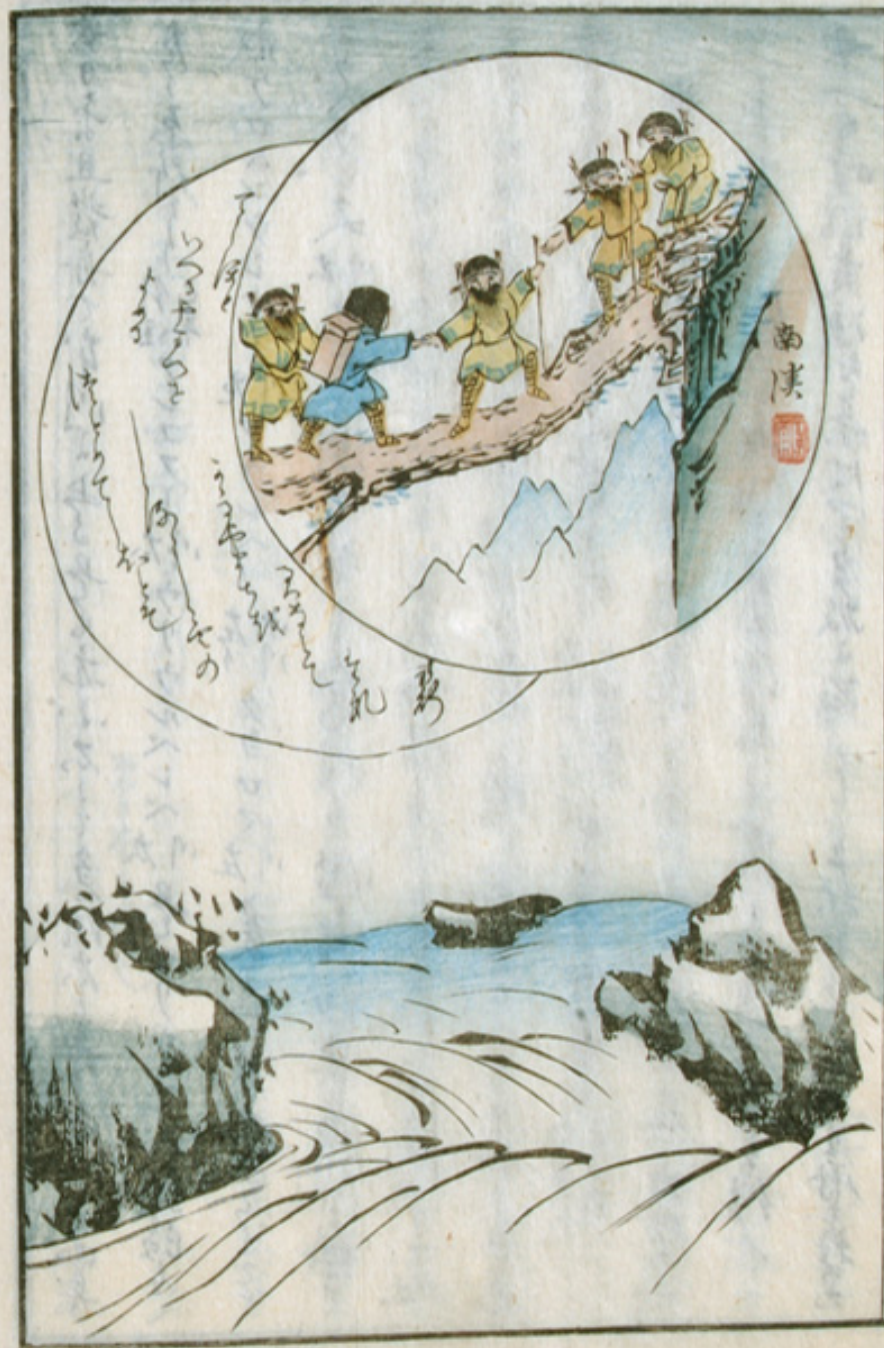
仙臺風日澄係款



詠 歌 集

南子所造在又行也

南子



南子

されしを時命初種 幸余子と云う 北都の大概を見て 年際二役より是

本川をよる 春ウツ 流人 家之部 コウカイ 西内 西人 エトレン 湯 西内 西人 サカイ 西内 西人 さて マクシヘツ

川クシカツテツクル 人 事之部 エツトモ 西内 西人 アヘカヌカ 西内 西人 トヒタ 西内 西人 此 西内 幸 藤 老 の

湯の子の腐爛 いふ 西内 西人 此 西内 西人 此 西内 西人 此 西内 西人

まう 此 北 密 淫 成 之 陰 怒 之 時 之 有 女 之 乳 之 神 之 擗 之 執 之 小

石を三入と見 之 探 之 西内 西人 此 陰 怒 之 時 之 有 女 之 乳 之 神 之 擗 之 執 之 小

此 志 之 時 陰 夫 之 擗 之 也 如 此 外 之 文 之 也 是 則 之 武 内 宿 禰

與 甘 美 内 宿 禰 於 是 二 人 各 堅 執 而 爭 之 是 非 難 決 天 皇 勅 之 令

請 神 祇 探 湯 是 以 武 内 宿 禰 與 甘 美 内 宿 禰 共 出 于 磯 城 川 濱 為

探湯武内宿禰勝之 應神記 九年條 令諸氏爭姓紛亂不定即盛煮湯令

以手探攬詐偽者爛真誠者全 今義 是 則 之 武 内 宿 禰

飯 之 肉 之 也 如 此 中 之 事 之 難 之 也 他 地 之 事 之 難 之 也

等 斗 殊 之 事 之 也 此 和 之 事 之 也 此 和 之 事 之 也

是 之 劍 著 手 節 乃 崎 万葉 吾 妹 兒 久 志 呂 同 在 臂 上 者 名 之 為 劍

和 名 クレコシク タフレノ サヤ 是 之 劍 著 手 節 乃 崎 万葉 吾 妹 兒 久 志 呂 同 在 臂 上 者 名 之 為 劍

多 之 事 之 也 千 事 萬 苦 之 事 之 也 上 之 事 之 也

有 人 家 之 事 之 也 連 之 事 之 也 アエリテニカ 西内 西人 トヒツ 西内 西人 家 之 事 之 也 書 之 事 之 也 此 之 事 之 也

利 之 事 之 也 草 根 堀 之 事 之 也 アヤヤ 此 之 事 之 也 又 一 事 之 也 此 之 事 之 也

是 之 事 之 也 穰 之 事 之 也 此 之 事 之 也 土 人 之 事 之 也 此 之 事 之 也 此 之 事 之 也

人間一個来

岩壁に記し大菩薩原より鹿角のちり歩け能きあり又昔より此は
 若くは石のまき草トナイタイベ川尾ヲサウトロマ川尾又フリレマ川尾此等
 しく宿に此等ハ刺蝮トビハシ多ありし人等を人々味を一撮し極め投せ
 や小石のるる者十足物を味味取らるる群うらを取てむはむを取
 ずし串刺し炙食しむる味實に美し味味好味あり又むる儀
 ともし一此玉名ヲクリカニキリしと氷腫の薬なり此地を病多
 かりしは此蟹ありしを能く他は此を付むるよしありしと
 病に地は其後治しむるよしありし事此物との結しむるよし
 と以別是獸高の蟹ニカラハムなりしと伝家より言ふ今わたりしと思はれり

彼物ありし此蟹と記し遠去更サリカニしと云ふ今わたりし
 ありし今わたりしと云ふ今わたりしと云ふ今わたりしと云ふ
 實之因は曰く蘇峇生走獸及牛馬諸畜肝膽之間中小者如粟如榛
 其狀白色似石非石似骨非骨本叶元祐三年十一月十日大師以病終
 于所居十九日火葬得青碧舍利數百粒大圓茶通義且垂仁帝八十
 七年丹波國桑田村有大鼓之腹有八尺瓊勾玉日本記字いかにん
 女三百分若くは源義隆衣を侵し肌凍るや乙時以へんケヌカナン中
 ありし此水凍石持のレヘンへと向背しむるよしありしと云ふ
 ありし連山のふた一つの丸山を去年石持高りてんしむるよしありし
 と云ふ此川流く項を也て中より東西にレヨコツモン西に石持南の方チ

廿九日尋夜タカヤレリニ宿を此を終る由とて終夜を聞たり

深山木よ心もくも巢をわしと難くくわつたつて林をまをす

晦日は夕乃と云所之を暮しれども首長子エナラを仰ぐ又サレヤンコにて

カモイノ心志も板をぬ取す月夜チライノ 出人多月ありエナラを

新夷人のこころをさびしうら天塩川へ宿をたのむのこころをたて

七月初日お入るも水綿酒烟を針糸をまをし教日の坐方を耐く海を

散步しなると浮見あつた汁は五経考の目を一板拾ひ忠是も数年海

流に漂ひわら後手取をなると汁のおわり頗るを夜しと抄りて後へ

滄りとはつ又も我は行くまわしれまうらまをし一ををたつし多し餘亦尚毛

夷苦境人皆知毛夷樂地知者誰終年浮沈波濤際一朝相念酣醉時醉

弄中琴何所說傾聽只恨言侏離人言此是源郎事源郎郎當真何

然遺風猶見腫弩味幽荒今存血食祠多氣山人好奇士身如狐鴻

度天涯勝槩遺蹤探討遍飛泳潛動皆華之適侵波瀾收片板不學

嬰底辨琴材奇器終歸好奇手珍襲千里徵我詩嗚呼我詩何足道

山人好奇理所宜消埋奇氣人不識山人發揚千歲垂願得毛夷彈

琴山人通譯我為源郎淚一揮ま向山履松生 松生磊落又瀟洒

十年足跡遍天下六航絕海入夷島州行露宿涉山野好事與吾同

臭味拾得古琴喜眎我開匣古色足驚人滿堂賓客爭進坐斷絃誰

傳微外音焦尾幸免嬰下火知是先王遺愛物千載湮沒黃塵鎖一

朝現出豈偶然珍重只須錦囊裹天有意以夏變夷故遺此物助陶

治欲播 皇化移陋風。一洗髮被與衽左。今日假手吾松生。試鼓南風證虞夏。一齋不堪衆楚咻。無奈鄭衛亂頌雅。嗚呼鐘子不生伯牙死。無復人耳辨洋莪。焦尾斷絃儘亦好。縱有彈者少聽者。還君此琴三嘆息。高曲自古真賞寡。まゝ松園註曰老人註曰一章を以て其製を記す其為狀阮首琴身首長九寸有五軫孔身長四尺空其腹枯槁不辨木理寔為五百年前之物。按宋至道中太宗製九絃琴五絃阮而蝦人少異其製。別添新譜為夷樂者可知也。予素有好奇癖亦欣然謂生曰時已近隆冬予盍俟密雪闌寂之夜加絃於其上為予一試其音必有清亮異常者。予藏阿刺吉一壘久矣與子對坐且鼓且酌不亦一大韻事乎。況其聽抑揚之節會我洋之趣者。舍予而其誰

生領而去。まゝ石坊の門高 經表の海は又実と流と木と移るは由
 於の馴るも地も時も詩も歌也。予琴材を擇てを阮を以て據る
 ずまひ深くまゝ今依て一その操折を痛く奉りては
 思ひあふ人の為るな事をたらしむるなり。小方と云ふ何れも也
 之を報ひて一詩を納らん。と有り。時君深く此琴をたゞせし所。其國形
 の如きまゝなり。は是を以て例なき是にて東海を越んて出ぬり
 あり。於今も遺恨有り。まゝ

二日、阿の海を去りて出まを先達して大智の塚に介らば、其を以て
 今日馬士と云ふ人、まゝもや、淡を懐き、予も我々のまじりて馬に附し、馬是
 為す時、驚き、別て走る。危き中、度々、予も土人は、皆、此、漢、を、是、時、大、智、

教... 又... 是... 盲... 知... 夫... テレホの腰子して是夷地の
 名わくと... 想... 小方... 蝶... 蚊... とあさうと... 思... 性... 為人能く...
 所... 馬... 怪我... 奉使俄
 羅斯相記... 路多蝥如蜂其長徑寸。天無風或覆更熾行人嘗虛盛
 帳以納蝥而宿于外。帚十數齋下。人始得餐蝥牛馬流血身股盡赤
 馬軼不見深草間見蝥高如邱知其必斃棄不顧矣。是又テレホより
 小敷千甲... 及... 蝶... 嘴... 刺... 及... 蝶... 信... 崖... 石... 人... 有... 及... 余...
 馬を飛して顧もせずと夜フウレハツト布一其壁に張り置
 草... 刺... を... ち... け... 今... あり... 我... 物... を... 多... の... 肉... も... 食... け... け... け... け... け... け...
 天埜日記 ちん

跋

夫乃... 一... 神... 風... 伊... 齊... 此... 之... 乃...
 杉浦の何某... 此... の... おく... 子... 名... 山... 乃... 夫... 之... 中... 我... 之... 度...
 未... 傳... 矣... 未... 稱... く... 免... 免... 理... 見... 地... 乃... 形... 勢... を... さ... ら... よ... も
 い... ち... 凡... 俗... 情... 態... を... 示... 法... を... 示... して... 志... を... 示... した... ら... け... ば...
 難... 乃... 舟... 阿... 波... 之... 事... 其... 目... の... 人... の... 心... 事... とな...
 した... 教... 示... した... こと... よ... る... 事... さい... さい... を... 示... して... 阿... 波... 行... 景...
 我... の... 舟... 此... ち... 一... かの... れ... ぬ... 毛... ひ... と... 志... を... 示... して... 一... よ...
 と... 示... して... 一... かの... せ... ら... ち... 一... 此... 建... 之... 心... 事... 一... 一... 一...

さるの持志よかきはあそやるといふ事
舞思ふつとけり

この書はくは書といふこと
おんものさへもえそ志強ぬ未傳

又又と成といふこと
なる事月れるもの事

拙書在正正海濱



本堂おん懐おん園

